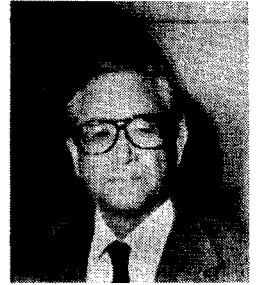


貿易摩擦と技術者の地位

東京都立工科短期大学 学長 渡辺 茂



ここで特に力説強調したいことは、わが国の技術者をもっと優遇せよということである。これは千言万言を費しても、けっして言いすぎとは思わない。考えれば考えるほど、わが国の技術者や技能者は冷遇されていると思うからである。

わが国は昔から技術者や職人を一段低い身分のものに見なしてきた。職人の技能を利用するが、それに見合うだけの報酬を払おうとはしない。その習慣が現在まで続いていて、事務員が机に居残りしているあいだも働きつつけている工具のほうに、給料も安く、待遇も悪いのが普通になっている。

実際に手を動かして物を作ったり扱ったりしているブルー・カラーのほうが、口先きだけで仕事をしているホワイト・カラーより給料が低いのはどうしたわけであろうか。これには長い歴史と習慣があるということならば、すぐにはどうしようもない。しかし何とかしなければ将来だんだん困った事態になるかもしれないと日頃感じている。

そもそもわが国の技術は、朝鮮半島を通して大陸から伝来したものが基礎となって定着したものである。わが国の古代において、最もおおらかに技術が進歩した時代は、万葉集や日本書紀の時代であった。しかし国分寺の建設とともに、技術は日本国中に拡がっていったが、ここで権力を得たのは僧侶や役人であって、建物を築き仏像を鋳込んだ職人は、縁の下の力持ちの役割を演じただけであり、報われるところは少なく、名も残らなかった。

当時中国から導入された律令制が施行されるようになると、それまでは、おおらかに登用されて

いた職人の地位が剝奪されていった。たとえば技術者に与えられた位階は、最高の者でも正六位どまりとなり、技術者は文官たちの無理解な命令にも甘んじなければならなかった。そしてこの習慣は江戸時代、明治大正時代をへて、現代にまで及んでいる。

技術者の立場はまさに「器用貧乏人宝」であって、手先が器用であればあるほど、他人の役に立って便利ではあるが、いつも貧乏にあえいだ。職人は笑顔で迎えられ、影で悪口をいわれた。

この器用貧乏人宝は昔のことであって現代はそうではないという説もある。げんに労働者はかなりの給料をとっているし、また、家を修理したり庭の手入れをする職人たちの賃金が高すぎるのではないかという声も高い。しかし果してそうだろうか。

ここにおいて、その反証の1つとなる貿易摩擦について考えてみたい。いったい貿易摩擦はなぜ発生したのだろうか。

技術者冷遇と貿易摩擦とのあいだの関係を考えることは、まだ誰も論じなかったことでもあり、急にそんなことを言いだすのは、何となく唐突ではないかと思う人が多いかもしれない。

しかし改めて貿易摩擦がなぜおこったのだろうかと考え、いろいろつきつめていくと、結局は、わが国の技術者が器用貧乏人宝的取扱いを受けた結果だということになりそうである。

以下の話はやや回りくどくなるので、もういちど貿易摩擦はなぜ発生したのかという問題提起を

行ない、これまでも言われていたことを、順を追って述べたあと、本論に入りたいと思う。

貿易摩擦の原点として、まず言えることは、日本の工業製品がアメリカのものに較べて、性能もよく値段も安いということである。

では、なぜ日本製品は、こんなによくて安いのか。この原因については、アメリカ側からも日本側からも多くの発言があり、なるほどと思われることが沢山ある。その主要なものを挙げると、次のとおりである。

第1は、日本の製品には物真似が多く、技術導入が正当に行なわれているか、いないかは、別問題として、研究開発費を較べてみると、日本はアメリカに比して不当に少ない。ゆえに、かなりの物真似が巧妙に行なわれた形跡がある。

第2は、生産性向上に対する取組みが世界各国に較べて、ダントツによく、特に信頼性向上とか品質管理に優れている。しかしこれらの手法はいずれもアメリカから導入したものである。

第3は、日本の年功序列制であって、社員は会社に忠誠心を誓い、家庭を投げ出しても会社のためにつくそうと一生懸命になる。これが積み重なると、残業も単身赴任も苦にならず、よい製品を安く早く多量に作りだすことができるというのである。

これらの指摘はどれも正しく的確を射ている。しかも第1点を除いては、別に非難されることはなく、むしろ他国が手本にしてみたいくらいである。また第1点の技術導入にしても、個々の小さな部分にいくつかの問題があったにしても、全体としてみれば、けっして不正とか卑劣とかというような非難は当らない。

このほか貿易摩擦の原因として指摘されるものに、関税障壁とか円安とかの問題がある。いずれも一半の理由がないわけではないが、これらを解決しなければ、貿易摩擦は絶対になくならないかという、必ずしもそうではない。何となれば、もう1つ忘れていたポイントがあるからである。そ

れは何かというと、それこそ、国内における技術蔑視の弊風なのである。

世界を困らせるほど「安くてよい」製品ができたのは、日本の技術者たちの汗の結晶であって、けっして政治家が作ったものでも、資本家が作ったものでもない。まさに勤勉実直そのものの技術者が作ったものである。

したがって日本の技術者は、もっと十分に報われてもよい。給料も高くてもよい。立派な貢献をした者の給料を低く押えておいたから、日本の立派な製品は安くできたのである。そのよい製品を商社が口先きで売って、商社が莫大な利益を収め、商社マンの月給が技術者より高くなる。技術者はひたすらに働き、ひたすらにより知恵を出しているにもかかわらず、大して報われない。しかも、せっかくもらった給料は、きびしい税金査定によって国家に収めなければならぬ。単に金利や土地の値上がりで得た金も、粒々辛苦してかせいだ金も、まったく同じ税率でまきあげられ、その税のほとんどが技術者以外の手に渡って消費される。

まさに「一将功成つて万卒枯れる」とは、現在の日本を言いあてたものではないかと思うくらいである。

では貿易摩擦をなくするにはどうすればよいか。その答は、かくも立派な工業製品を作りだした日本の技術者の給料を上げればよいということである。そうすれば、立派な製品は高価になるという本来の状態になり、輸出も適度に押えられるだろう。

一方、技術者の国内における地位は向上し、能力あるものが報われる体制ができるだろう。

もちろん、あまり高価になりすぎると輸出は少なくなりすぎる。技術者の給料と輸出量とは、適当なバランスの下にうまく落ちつくはずであり、この具体策を考えるのが、行政家であり、経営者であるのではないかと思う次第である。